

第四話 四年後

晩秋の夕暮れに染まる、都内某所のライブハウス。

いつものその時間なら、アーティスト目当てに行列ができる建物前の道路は、マイクロバスを含む数台の車で埋め尽くされていて。

その入口の扉には『本日、撮影のため貸切』という、普段はほぼ見ることのない手書きのプレートがかかっていたりした。

「霞先生入りました～！」

若いADの叫び声が周囲に響くと、ライブハウス内にさっと緊張が走る。

と、奥の方で主要スタッフらしき人たちと談笑していた、ニットを首に巻いた『いかにも業界人』な感じの男が、満面の笑みとともに、その若いAD……の後ろに控える若い女性のもとに素早く近寄る。

「霞詩子先生！ いやあ、先生自ら現場に来ていただけるなんて感激だなあ！」

「ご無沙汰してます長瀬プロデューサー……それ以上近寄らないように」

と、歩を緩めずその肩に両手を置くべく詰め寄ろうとする中年男の目の前に、彼のお目当てとは別の人物が素早く割り込む。

「やだなあそんな怖い顔で睨まないでよ、お苑ちゃ～ん」

「……あとその呼び方は金輪際やめてくださいって前回言い

ましたよね？」

こちらは黒のスーツにビシッと身を包んだ、三十半ばの、どう見てもバリバリのキャリアウーマン。

現在の名刺の肩書きによると『不死川ファンタスティック文庫・不死川エモーショナル文庫統括編集長』のお苑ちゃん……ではなく町田苑子。

まあ要するに、前述の作家、霞詩子が本を出しているレーベル全てを牛耳っておきながらも、陰では『霞詩子(&紅坂朱音)専属マネージャー』の別名をほしいままにする、大物なんだか小物なんだか分からない敏腕編集者である。

「ま、まあとにかく、原作者様と版元様がわざわざロケ現場にまで激励に来てくれるとは！これで現場のモチベーションも一気に上がるなあ！」

長瀬と呼ばれた、軽薄中年を煮詰めてさらに軽くしたようなプロデューサーは、そんな町田の冷たいあしらいにも全くひるむ様子はなく、口から次々と軽々しい社交辞令をだだ洩れさせつつ、渋めの笑顔を振りまく。

「まあ不死川としてもやはり、“今度こそ”いい映画を作っていただきたいというのもありますし、現場には是非とも頑張っていたきたいとの強い思いがありますので」

「言っておくけど前作の映画には僕関わってないからね？」

「ええわかってますとも。今度こそ絶対に詩ちゃん……霞先生

も納得のいく、『売れるだけでなく見れる作品』を作っていただくためにあなたを呼んだのですから」

「そ、そりゃ、どうも……」

「……だから絶対に外すなよ？ 二作連続でク○みたいなもん作ったら○すぞ？」

「激励に来たんだよね？ そうなんだよね不死川さん？」

「……ええと町田さん、そろそろ」

などと、製作委員会メンバー同士による心温まる鏝迫(つばぜ)り合(あ)いに、さすがに痺れを切らしたかのように、取り残された主役の先生……霞詩子こと、霞ヶ丘詩羽が、開始三ページ目にしてようやく口を開いた。

「あ、ああ、ごめん詩ちゃん。それじゃ私たち、ちょっと楽屋の方に伺いますので……」

「ああ、キャストへの挨拶だったらこっちから呼んできますよ。お〜い誰か〜、楽屋から『lovely tail』のコたち呼んで……」

「ああ、すいません、用があるのは、主役の人たちじゃなくて……」

※

※

※

今年の春に発売された、霞詩子最新作『I, she tell you』……

高校生の四人組ガールズバンドが主役の、音楽と友情と恋を織り交ぜた瑞々しさ全開な青春小説は、前作の支持層である若い女性を引き続きガッチリ取り込みつつ、さらに悲恋物語だった前作を遠巻きに見ていた潜在的ファン層にもアプローチし、狙い通り、前作を上回るスマッシュヒットを達成し。

そして発売から三か月も経たずに映画化が決定……まあこれは、実際には執筆前から決まっていた“案件”ではあったけれど。

それでも今や『恋愛の伝道師』とか『女子高生のカリスマ』とか『美人すぎる作家』とかの異名を(本人は不本意ながらも)ほしいままにしている霞詩子の名声を、さらにガチガチに盤石にしたのは言うまでもなく。

※

※

※

「お疲れ様氷堂さん……いえ、今は mitchie だったかしらね？」

「あ、あつれ〜？ 霞ヶ丘センパイ!? どしたのこんな所に？」

「どしたのも何も、一応これ私の作品なんだけど……」

ライブハウス内の楽屋には、今夜はアーティストではなく、アーティスト”に扮したキャスト”たちが所狭しと詰め込まれていた。

詩羽が声を掛けたのは、その、すし詰めにされた、いわば“端役”の人たちの中心に堂々と……いや相変わらず厚かましくどっかと座り、全員と陽気に話しては大きな声で笑っている、長身の女

性。

それは役者ではなく、ライブアーティストの mitchie……本名を、氷堂美智留。

「あ〜そっか、そういえばあたしが呼ばれたのって、センパイのゴリ押しだったっけ〜。あっはははは〜」

「……この役に適任なのがあなた以外に思い浮かばなかっただけよ。誤解されるような言い方やめてくれないかしら？」

今日の、このライブハウスでのロケは、映画『I, she tell you』の、前半の山場シーンの撮影だった。

ひょんなことで知り合って、一緒にバンドを組むことになった四人組の女の子たちの、初めてのステージ。

様々な他のアーティストたちと触れ合い、先輩たちのパフォーマンスにも触発されつつ、彼女たちの初ライブは大成功。ますますバンド活動にのめり込むという、物語の転換点となるシーンだ。

「ま〜確かに、センパイの小説読んだ時にも、『サキって今のあたしだよな〜』って思わないでもなかったけどね」

「思わないでも何も、間違いなく今のあなたなのよ」

その中でも、神懸かり的なパフォーマンスで彼女たちに一番のインパクトとモチベーションを与える、根無し草のソロアーティスト『サキ』役だけには、詩羽は迷うことなく“原作者特権”を行使した。

未だにメジャーデビューはしていないけれど、伸びのある高音

ボーカルと、プロレベルのギターテクニックで、全国各地のライブハウスにその名をとどろかせる”知る人ぞ知る”実力派アーティスト。

「てゆっかさ～、主役の『lovely tail』の四人組だってさ～」

「だいぶ美化してあげたでしょう？感謝して欲しいくらいよ」

「な～にが『バンドと恋と友情の物語』だよ～。恥ずかしいなあもう！」

「ちょっと恥ずかしいくらいの方が若いコには受けるのよ」

「そういうのはあたしたちがモデルじゃない作品でやってよ～。ほんっとセンパイって、実体験をネタにするの好きだよね～」

そして、かつて秋葉原を席卷した、四人組アニソン系ガールズバンド『icy tail』の、ボーカル&ギター担当。

「他のメンバーのコたち、元気にしてる？」

「こないだ集まったけど、元気だったよ……あたし以外、もう誰も弾いてないけどね」

「そう……」

けれどその、小説のモデルにもなった伝説のガールズバンドは……

メンバー全員の話し合いの結果、二年前に活動を休止した。

「とはいえ、正直みんなの方がよっぽど安定してんだよね～。
銀行勤めてたり、実家暮らしだったり、結婚間近だったりさあ」

「それはそうよ。学校出て、社会に放り出された後まで、フラ

フラと昔の夢を追い続けるとか、馬鹿のすることなのよ」

「さっすが～、馬鹿が言うと言得力が違うよね～」

「お互いに、ね」

と、二人は、数年ぶりの再会にもかかわらず、何年来の親友のように、ぴったり息の合った苦笑を交わした。

「本当に、会社作ったのね……」

「今後ともよろしく～♪」

しばらく旧交を温めた後、美智留が思い出したように取り出した名刺には、彼女のアーティストとしての肩書きではなく、『株式会社 blessing software 作曲家 氷堂美智留』という肩書きが、シンプルにしたためられていた。

「ま、まだ一本も作品出してない、売り上げゼロの会社なんだけどね～」

「それで、デビュー作はいつ出るの？」

「一応、年明け早々を目標にしてるらしいけど、もうみんなヒーヒー言ってるよ～」

「年明け発売なら、そろそろマスターアップ間近でしょうそれ……」

「大丈夫でしょ、何だかんだ言って、みんな同人の頃から修羅場に慣れてるからさ」

「同人と商業は違うでしょう？ 売上の見込みは？ どういう

ビジネスモデルを考えているの？ 配信？ ソーシャル？ それともパッケージ？」

「ん〜、その辺も色々考えてるらしいよ？ なんでも最初から海外展開も視野に入れてるんだって」

「それってローカライズを甘く見ていないかしら？ そもそもその場合、企画段階から海外を意識したマーケティングをしないといけないと思うのだけど、その辺りもちやんと考慮に入れているんでしょうね？」

「詳しいねセンパイ？ 小説家のくせに」

「……元ゲームサークルの人間だもの、常識よ」

もちろん、それは常識でもなんでもなく。

週に一度、『blessing software』のエゴサを欠かさない詩羽だからこそ、彼らの商業化や作品展開が未だに発表されていない現状が、あまりにもどかしく、心許なくて……

だからつついゲーム業界の現状についてまで夜を徹して詳細な調査が進んでしまい、締め切り当日になって町田の頭を抱えさせることもしばしばで……

「ほんとと心配性だねセンパイは……離れた後も、トモのことも、澤村ちゃんのこともずっと追いつけてさ、まるで……」

「そこで『お母さんみたい』とか言い出したら今すぐ今回の仕事降りてもらおうわよ？」

「あはは……」

と、顔を背ける詩羽を、逆に美智留の方が、お母さんみたいな慈愛溢れる視線で優しく見つめていたけれど、もちろん顔を背けていた詩羽にはそれは伝わらなくて。

「大丈夫だよ、センパイが見ていない間も、みんなちゃんと成長してる」

「……本当？」

「ああ、波島ちゃんの絵、ますますスッゴイことになってるよ～？ 澤村ちゃんが新作出すたびに『また差が開いた～!』って叫んでるけど」

「彼女、らしいわね」

「波島兄ちゃんの方も、ますますあくどさに磨きがかかっててさ。ま、兄ちゃんがいる限り、潰れたりはしないでしょ」

「……その代わり最初の目的を見失って、ただ存続だけが目的になってどんどん疲弊していったみんな死んだ魚の目をして面白いかどうかもわからないゲームを惰性で作り続けていくなんてことにならないかしら？」

「……ホント、あんたたち(恵と英梨々と詩羽)の兄ちゃんに対する容赦なさはさておき、それこそ大丈夫！ トモはいつまでも変わらないよ！ ずっと夢を追いつけてる」

「……ずっと夢ばかり見ているからこそ、心配なんだけど、ね」

「もう、センパイも少しはトモを信じてあげなよ～、加藤ちゃんみたいに、さ」

「っ……それは、近くで、ずっと見ているから、そんな余裕で、
いられるのよ」

その瞬間……

ほんのちよつとだけ、まだ、胸に痛みを感じられる自分に……

詩羽は、呆れと、誇りと、情けなさと、嬉しさを、同時に、微妙に、覚える。

「まあ、加藤ちゃんが余裕こいてるのは本当だけどね。最近なんかさ、あたしがトモの家に遊びに行くと『こんにちは氷堂さん。で、今日は何時ごろ帰るの？』っていきなり聞くんだよ〜。絶対に泊ませようとししないの」

「……それは彼女持ちの男の部屋に未だに泊まろうとするあなたに問題がないかしら？」

「けどあたしとトモは家族じゃん？ほんとと、なんか今の加藤ちゃん小姑みたい」

「きっと加藤さんもあなたに対してまったく同じ感想を持っているでしょうね……」

けれど、その空気を敏感に察知したのか、あるいはまるっきり読んでいないのか……

美智留の、いつもの軽快で豪快な家族語りが、その痛みを素早く洗い流してくれて。

「ね、センパイ……」

けれど詩羽はすぐ気づく。

美智留は、空気を読んでいなかったのではなく、完璧に読んでいたのだと。

「センパイがすることは、心配じゃないよ。

トモにとっての、高い壁で、い続けることだよ」

数年ぶりに会った、戦友にして、悪友は……

昔通り、明け透けで、傲慢で、遠慮もなく人の中にずかずか入り込み。

「センパイはさっき、言ったよね？」

自分は馬鹿だって。

社会に出た後まで、フラフラと昔の夢を追い続ける、大馬鹿だって」

「“大”までは付けなかったけど……」

「けど間違いなく、センパイは大馬鹿だ。

フラフラと昔の夢を追いながら、成功しちゃった。

夢でメシが食えるようになったちゃった、馬鹿を超えた、超馬鹿

だよ」

「そこには、あなたも含めたはずだけど……」

「もしトモが、夢を諦めてまっとうに生きていこうとしても、
諦めることをためらわせちゃう。

憧れて、つい追いたくなっちゃう、成功者だよ」

「氷堂さん……」

けれど昔と違って、随分大人になっていて……

随分大きく、優しくなっていて……

「ね、センパイ……

ブレないでいてよ……トモのために」

「自分はずっと馬鹿やってるって。

しかもそれで成功しちゃってるって。

みんなに、ずっと誇り続けてよ。

「そしたらトモは折れないよ。

センパイが成功し続ける限り、諦めないよ」

「センパイが成功してるんだから、
いつか自分たちも成功できるはずだって……
ずっとそう言い訳しながら、夢を追い続けるよ」

「センパイが成功してるのに、
どうして自分は成功しないんだって……
ずっと嫉妬して、歯を食いしばり続けるよ」

その歌と、その演奏で、たくさんの人の心を掴んできた……

そんな、アーティストとして培った実力は、
曲に乗せずとも、その詞だけで、じわりと心に触れてきて。

※

※

※

「そろそろ本番入りま〜す！ 皆さんスタンバイお願いしま〜
す！」

「およ、やあ〜っと出番だ〜！」

「あ……」

慌ただしく AD が飛び込んできたのと同時に、楽屋内が一気に
喧騒に包まれる。

それをきっかけに、美智留の魔法のリリックからようやく解き放たれた詩羽は、きょとんと楽屋内を見回し、慌てて手の甲で自らの目をこする。

自分がどのくらいの間、さっきまでの表情でい続けてしまったのかもわからぬまま。

「あたしの出番は『lovely tail』の一つ前だからもうちょい先だよな？なら今のうちに台本チェックしとくか〜」

慌ただしげにスタッフやキャストが動き出す中、身も心も取り残されてしまっていた詩羽は、ひとまず混乱していた感情を整理し、自分が今すべきことを考える。

「……ま、実際のところ、歌うシーンだけで台詞ないんだけどさ〜」

とはいえ、こうして現場が動き出してしまった以上、もはや原作者にできることなどなく、あとはおとなしく、悪友の映画デビューをハラハラしながら見守るだけ……

「……ねぇ氷堂さん、ちょっと遊んでみる気、ない？」

の、はずなのに……

詩羽は、今こそ確信を得たような悪意満々の笑みを浮かべ、“当初の予定通り”、鞆の中から紙束を取り出した。

※

※

※

「……だ、第二稿、だってえ!？」

「ええ、実は決定稿の脚本に、一つだけ、引っかかっているところがあったのよ」

既に他のキャストやスタッフが全員ステージに移り、二人きりになった楽屋の中。

……いや正確には、扉のすぐ外でもう一人、町田が頭を抱えてしゃがみ込んでいたけれど、今の彼女に、もうこうなってしまった詩羽を止める術はない。

「このシーン、あなた……サキの圧倒的なパフォーマンスに触発されて、実力以上の演奏をした『lovely tail』の初ステージは大成功、っていう段取り “だった” んだけど」

「……だった？」

「でもそれって不自然でしょう？ 世の中、そんな上手く行く訳がないのよ。ここは一つ、『lovely tail』の皆には、ちょっとした挫折を味わっていただかないと……」

「ざ、挫折……？」

「彼女たちの前にステージに上がったサキは圧倒的なパフォーマンスで観客を掴む……そして、『lovely tail』の出番の前に、“これでお開き” な空気にして欲しいのよ」

「ちょっとちょっとちょっとお!？」

「あら、実際のライブにだってよくあることでしょう？ お目当てのアーティストの出番が終わった瞬間にお客が大量に出ていってしまって、後のアーティストのステージがお通夜になることって」

「そりゃあるよ？ あるけどさあ、でもそれって、残された方には地獄だよ!? 痛々しくて見れらんないよそんなシーン！」

「そうよ地獄よ！ 地獄を味わわせてやるのよ彼女たちには。だいたい初ステージから大成功で一気にスターダムにのし上がるなんて、そんな甘えたシンデレラストーリーなんてある訳ないのよ！」

「いやいやあたしそうだったから最初のステージで大成功したから！」

「だとしても、私の作品の登場人物にそんな甘い汁吸わせてなるものですか……だいたい原作じゃもっと挫折シーン沢山あったのに尺の関係とかちょっとしたアレンジとか適当なことってク○改変を強要してきやがってあの○ソプロデューサー……っ」

「ク○改変の恨みをあたしで晴らそうとしないでよこの○ソ原作者!？」

「あなたならできるでしょう氷堂さん！会場のエキストラたちを熱狂させて、『lovely tail』のメンバーにプレッシャーをかけて潰してしまうこと……できるでしょう？」

「センパイ思った以上に全然変わってないねその大人気ない

とこ！」

「あなたが言ったのよ氷堂さん？ 夢を諦めない馬鹿のためには高い壁が必要だって。『lovely tail』が馬鹿でい続けるためには、サキが超えられない高い壁でなくちゃならないのよ！」

「で、で、でもさあ！それがもしうまくいってもさあ、あたし、スタッフ敵に回しちゃうじゃん？」

「まあ、回すでしやうね」

「それ困るよ！あたしがこの仕事請けたのって、製作委員会にサニーミュージック入ってたからなんだよ？ メジャーデビューのチャンスだと思ったからなんだよ!? そんなテロやっちゃったら出入り禁止になっちゃうよ！」

「あなたのメジャーデビューと私の映画とどっちが大事なのよ！」

「メジャーデビューに決まってるじゃああああ〜ん！」

※

※

※

そして、その後の撮影は……

原作者、霞詩子の思惑通り、混迷を極めに極めまくった。

美智留は結局、最初は渋々、途中からノリノリで、スタッフの指示を無視しまくり。

エキストラを思い切り煽り、完全に自分のホームに引きずり込

み、元々撮影用に用意した曲以外に五曲も追加で披露し、圧倒的なパフォーマンスを示し……

そして彼女がステージを去った時、そこには疲れ果てもう叫べなくなったエキストラと、舞台袖で半泣きになりステージに上がれなくなっ『lovely tail』のメンバーが残され。

そんなこんなで、まさに原作者、霞詩子の思い描いた第二稿は、忠実に再現された。

※

※

※

ついでに、その後の公開時……

その、美智留の迫真のライブシーンは見事に全カットされ、何事もなかったかのように、青春ガールズバンド映画『I, she tell you』は一定の評価と、なかなかの興収を上げた。

※

※

※

さらにさらに、その後の BD 発売時……

映画公開時にお蔵入りになった美智留のライブシーンは、『ディレクターズカット版』として特別収録され。

ここでようやく、氷堂美智留こと mitchie に、サニーミュージ

ック “とは別レーベル”から、メジャーデビューの声が掛かることとなる。

(了)